



ながおか

文ふみの林

第 3 号
平成19年夏号

人間と環境をテーマに改組した 長岡大学 キャンパス

中越六大学を訪問する①

中越地域（長岡・柏崎・魚沼）にある六つの大学をシリーズで紹介します。
第一回は、長岡市の御山にキャンパスのある長岡大学です。

長岡大学は平成十九年度から学部名称を経済経営学部と改め、環境経済学科と人間経営学科の二学科を置くことになりました。新しい時代に相応しい経済と経営を学んでもらいたいと考えたからです。二十世紀は工業の発展で経済は成長し、社会はモノに関しては豊かになりました。その過程で、経済合理性と経営の効率が第一に追求され、自然環境や人間らしい生き方が犠牲にされる面も少なからずありました。この結果が今の地球環境問題であったり、ゆとりの失われた生活であったりするのです。

いくら経済が発展しても、人類生存の基盤である地球環境が損なわれたり、人と人との繋がりが壊れては、元も子もないでしょう。二十一世紀には、地球環境に優しく、地球環境を維持しながら発展することのできる経済システムに作り変える必要があります。企業経営も顧客はもとより働く人にとっても優しく思いやりのあるものにならなくてはいけません。そして、現実の社会はそのような方向を目指して動き始めています。

「環境に優しい経済」「人に優しい経営」を学ぶというコンセプトはまだ学部としては珍しいようです。私たち長岡大学は二十一世紀の新しい経済と経営のあり方を切り開くという意気込みで、教育プログラムの開発を進めています。

原陽一郎（長岡大学学長）



CONTENTS

巻頭インタビュー

- 2 「五尊文芸」編集の丸山恵さんに聞く
「長岡活字文化の舞台裏」

特別寄稿

- 6 花として／小熊ゆかり

地域文化インタビュー

- 8 日本舞踊 藤間流教授 藤間 勘保さんに聞く
「伝統の古典を踊る」

地域の食文化

- 10 長岡野菜は宝物／鈴木 圭介
12 野菜カレーのまち・長岡／清水周

文化の震災復興

- 14 「東忠」十代目主人 東亮一さん・女将 八重子さんに聞く
「小千谷の老舗割烹二百五十年の歴史を消すことはできない」
16 小千谷北越辰史跡復興支援の会 野澤金一郎さんに聞く
「復興しなければ草に覆われて忘れられてしまう」

本棚の中から

- 18 女神の孤独／草間 友子
20 山本周五郎、長生橋を渡る？／佐藤 正二

散歩道

- 22 三年目を迎えたフェニックス花火／廣井 晃

中越・長岡をスケッチする

- 24 楽しく描いて：絵を描く暮らして思うこと／渡部 司

- 未来の文化の担い手を目指す 中越高校写真部
越後長岡百景・百歌③ 五十(ごとう)の市

表紙の絵／『夢見る母性』

野澤 茉央 (のさわ まお) 中越高校3年

■想い／この作品の描き方は、有名なスペインの画家パブロ・ピカソの「立体主義(キュビズム)」その総合的キュビズムの手法が基本になっていきます。お母さんは、大人の女性なので母親以外にも色々な顔を持っていきます。そして赤ちゃんは、お母さんから、そよ風のように吹き寄せる愛情をいっぱいを受けて成長していきます。少し怖い感じもありますが、現実の母親は、ただ優しいだけではありません。時には厳しく、時には励ますなど、さまざまな場面をイメージして描いてみました。



長岡活字文化の 舞台裏

「互尊文芸」編集人 丸山 恵さんに聞く
(聞き手・安藤哲也)

印刷会社の社長として、市民の自費出版を数多く手がけるとともに、市民文芸誌として三十年あまり続いた「互尊文芸」の編集にも携わってきた丸山恵さんに、その舞台裏を聞いた。

○「互尊文芸」の編集を長い間されていますが、そのきっかけは。

「互尊文芸」というのは同人誌とは違うんですね。昭和五十年頃ですが、長岡の互尊文庫で市民の「読書の会」があったのですが、読むだけじゃなくて、自分たちも小説を書いてみようということになったのが始まりのようです。最初の二号まではタイプ印刷で、三号から私の印刷所で本づくりを引き受けるようになり、編集にも加わるようになりました。

○他にはどんな人が編集を。

当時、互尊文庫の司書だった稲川明雄さんと教員の佐藤正さん、それから私。その後に発行所を喫茶いそしぎ内に移して、いそしぎの川上洗さんも加わったですね。本の奥付のところの編集代表は、その号ごとに佐藤さんだったり私だったり





互尊文芸 第3号

ですが、実質は稲川さんがいろんな段取りをしていたと言ったほうがいいかな。それに表紙の題字は、互尊文庫の館長だった内山喜助先生の字なんですけど、内山先生も影の応援団でした。

○「互尊文芸」の特色は。

市民が誰でも自由に投稿できる市民文芸誌というのがウリでしたね。特定の同人はいなかった。経費は印刷代と郵送代だけですが、一冊千円くらいで売って、本の売り上げだけでまかかっていました。いつも「破綻寸前」とか言ってたけど、当時は書くことへの関心も高く、掲載できないくらい原稿も集まったし、本の売り上げもそれなりにあって、少しは黒字でしたよ。

○最近「互尊文芸」を見かけないのですが、休刊ですか。

三年くらい前に出したきりかな

あ。原稿さえ集まれば、いつでも出すつもりはあるのですが、みんな歳とったし、状況は随分と変わりましたね。

○丸山さん自身も『輪廻の出発』などの小説を書かれていますよね。

そうですね、短編を十編くらい書いたかな。

○そんなにあれば丸山さんの小説集を刊行できますね。

いやー、いいよ。恥ずかしいし。(笑) いろいろ試してみたけど、文芸って、どういふものか、難しいね。集まってくる原稿のなかには、読者を全然意識していないものもあって、そういうのは活字にしても一人よがり。公にする以上は読者の心に伝わるものを意識しないと。と、私は思いますけど、自分のことになると、やっぱり、難しいね。

○文学は子供の頃から好きだったのですか。

私は越路の朝日の百姓の家に生まれましたが、中学生くらいの頃から本にアコガレのようなものがあった、床屋に行くために貰った金で本を買って親に怒られたりしましたよ。最初に買ったのは日本文学全集だった。

長岡活字文化の 舞台裏

○本業は印刷会社を経営されているわけですが、趣味と実益を兼ねた仕事ですね。

印刷屋を始めたのは昭和四一年で、確か三十、一か二歳だったですね。本と関われるということでは良かったですが、毎日、夜十一時、十二時まで、がむしゃらに働きづめだったから、本を読む暇なんて全くなくて、本は読むものじゃなくて、買うものになってしまった。

○家中、本だらけだとお聞きしましたが。

数えたことはないのですが正確には分かりませんが、五千冊くらいあるかもしれない。床が落ちないか心配で、以前は、本を入れておくアパートを借りたり、会社の屋上にプレハブを建てて本を入れておいたりました。

○いま、その本はどうなったのですか。

息子の家の一階のフロアー全部が書庫のようになっていきます。それでも足りなくて、分散せざるを得ない状況ですね。商売を始める前は、時間があれば本屋に行つて、いろいろ読みあさりましたが、今は読むというよりも、本を集めるという感じかな。家族に言わせると、一種の病気ですよ。



タイプ印刷時代(昭和43年頃)

自宅廊下に並べられた本

○今も、毎日のように本屋さんに
行ったりするのですか。

書店のほうが私の傾向をよく承
知しているので、行かなくても、「こ
の新刊、どうですか」って持ってきて
くれるんです。そうすると、つい
つい買ってしまうんだよね。いろ
いろな分野にわたるんですけど、全
集ものとか歴史の資料集とか、値段
の高いものが多いのですよ。(笑)

○話を聞きしていると、家族の皆
さんの生活にも多大な影響があ
りそうですね。

そうそう。妻も息子たちも私の
本を邪魔にしてね。そのうち、この
本がどうなるのか、心配だね。

○話を戻しますが、本好きが昂じて
印刷屋さんを経営されるように
なって、一番良かったことは。

地域の方々の出版のお手伝いを
させてもらいましたが、その過程で、
素晴らしい人たちと巡り会うこと
ができたのは幸運でしたね。一番
懐かしく思うのは、民話の研究をさ
れていた水沢謙一さんですね。ま
だ、印刷の仕事を始めて間もない頃
でしたけど、私にとつての最大の出
会いです。とても、かわいがってい
ただきました。

○苦労もおありかと思いますが。

これは、どこの印刷屋も同じで
しょうが、「校正は魔物」と言っ
て、どれほどしっかり校正したつもり
でも、間違うんですよ。お客さんか
ら「あなたたちプロでしょ」と言わ
れても、ねえ。いつだったかも、
「○○さんをお祝いする会」の標
題のところが「お別れする会」になっ
ていて、会の進行途中に気づいたん
です。身の縮む思いですね。

○なるほど、緊張の連続ですね。イ
ンタビュウの最後になりますが、
今後への思いを聞かせてください。
まだまだ老けていられないので、
私にやれることは、やっていますよ。



タイプからコンピュータへ

■ インタビュウを終えて

少しはにかみながら、ぼくとつと
した丸山さんの語り口のなかに、こ
れまで長岡の活字文化の土台を支え
てきた力強さを感じた。「互尊文芸」
の次の号を是非とも読みたいものだ。

特別寄稿

花として

文・小熊 ゆかり

おぐま ゆかり
歌手

長岡市出身で、東京渋谷を中心に歌のライブ活動や作詞曲などの音楽活動을 続けておられる小熊ゆかりさんから、ご寄稿いただきました。

「よし！ 今日こそは、あの山の麓まで辿り着くんだ。」お気に入りの三輪車を買って貰って以来、これさえあれば何処へだって冒険出来る！ そう信じていた私は、毎日家の近くの土手をひたすら三輪車を漕ぎながら、遙か彼方に悠然と横たわる山々を望み、意気揚々と出掛けた。

行けども行けども相変わらず山は遠くにあつて、夕暮れ時を伝える鳥の鳴き声に「今日もやっぱり辿り着けなかつたなあ」少しがっかりしながら山を振り返りながら家路に就く…。

長岡に帰って来るたびに、田圃が道になっていたり、新しいお店が出来ていたりで町の景色がすっかり変わってしまい、道に迷う事もしばしばですが、遠くの山々の眺めはあの頃のままで、幼い日の記憶が甦ります。

昔から私は、あの向こうには何かあるのだろうか？ 覗いてみたい、と考えるような好奇心の強いタイプだったのかもしれない。五歳からピアノを習い、ピアノストになりたい、そんな夢を抱いていた私は高校でロックという全く知らなかったジャンルの音楽に出会って、衝撃を受けます。この扉をどうしても開けて飛び込んでみたいと、突然五つもバンドを掛け持ちして、

言われるままにキーボードを弾いて、もうピアノはそっちのけ。そんな毎日を送っているうちに、今度は歌という扉を開けてみたくなった！そう思ったら、もう止まりません。「東京、東京。夢は東京にあるんだ！」東京の大学に入学と同時に数えきれない程のオーディションを受けて、少しずつ歌う事、そして様々な音楽の仕事をやれるようになりました。

正直言うと、中越地震があるまでは、そんなに自分に故郷があるという意識は無かった気がします。あの日は、仕事先でインターネットを見ていたスタッフに、「ご実家は大丈夫ですか？」と言われ、慌てて携帯から電話してみたけど通じない。家に帰ってテレビの映像に呆然となり、初めて事の重大さを知って、今まで大事なものを気にも止めずにいたことを心の中で詫げる気持ちでいっぱいになりました。

今更だけれど、復興を願って長岡をテーマにした曲を書こう、そう思い、「東京でライブをやる時に、毎回歌うようになりました。その「花として」という曲が、縁あって復興CDに収録され、又、市立劇場で行われた復興コンサートで直接歌を届ける機会を頂くことが出来ました。その時に、こんな私にも歌を通してやれる事があるんだ、又、私自身も自分の歌に支えられている、という事に初めて気付いて、今までただ好きでやってきた音楽だけでなく、これからは音楽でいろいろな人にお返しをしよう、歌い終わった後に、強くそう思いました。

今日も私は、雑踏の中を仕事に向かいます。信号待ちの一瞬、幼い頃に目指したあの山をふと思い浮かべながら…。



【プロフィール】

長岡大手高校、日大芸術学部(音楽学科ピアノ専攻)卒。在学中からCM作曲やバックコーラスとして様々なアーティストのコンサートツアーやレコーディングに参加。また、作曲家として楽曲を提供。自身もソロライブ活動を続け、'04に1stアルバム「FFortissimoPPianissimo」を発表。中越地震の復興支援として長岡市立劇場で行われた「Ryu's KOREAN Voice」応援コンサートに出演、復興支援CD「蠢動」にも参加。
新潟市のFM PORTで毎月第3土曜深夜25時～「小熊ゆかりのミュージックサプリメント」でパーソナリティを務める。

日本舞踊 藤間流教授 藤間勘保さんに聞く —— 聞き手・立川恭子

伝統の古典を踊る



板敷きの正面に「藤間勘保」と書かれた表札がかかる稽古場。裏とした着物の勘保さんに、日本舞踊の奥の深さを語っていただいた。

○勘保さんと日本舞踊のかかわりについてお話していただけますか。

私の母が言うには、小学校二年、七歳の時に、自分からどうしても踊りをやりたいたいと言いついて、藤間勘七先生のところへ習いに行くようになりました。昭和二十三年のことです。学校が終わると、毎日、殿町の稽古場に通っていました。中学、高校時代も、ずっと日本舞踊を続けて、十九歳で藤間流名取になりました。当時としては若い名取でした。その後、どうしても踊りが好きだったので、親に「短大にやったつもりで東京に行かせて」と頼みこみ、人間国宝の藤間藤子先生のもとで、かよいの内弟子にしてもらいました。朝の十時ころから夜九時ころまで、ずっと藤子先生のところにいるのですが、実際に稽古をつけてもらえるのは十分か十五分。二年弱くらいいて長岡に帰り、結婚し、家を新築するときには稽古場をつくってくれまして弟子を持つようにもなりました。もう六十年近く日本舞踊を踊っています。

○どんな人たちが日本舞踊を習いに来られているのですか。

今の日本舞踊には大きく二通りありまして、演歌のような今ふうの唄に合わせて踊る新舞踊と、清元、常磐津、長唄などを踊る古典です。私は古典しかしませんし、伝統の古典を踊るのが私の誇りです。そのかわり、弟子は多くないですけど。これまでに数人を名取に育てました。いま、私のところに習いに来ているなかで

一番若いのは、幼稚園の年中さんと小学三年の姉弟。その上は、いきなり五十歳代なんですけど(笑)。日本舞踊というと芸妓さんを連想しますが、私のところは、そういう意味では素人さんを中心。長岡の芸妓さんは和泉流と花柳流がお稽古場になっています。



○勸保さん自身は、どのように稽古なさるのですか。

私は藤間流家元の流派に属しています。家元の藤間勘右衛門さんというのは実は歌舞伎役者さんで、四世勘右衛門は「花の生涯」で井伊直弼を演じた尾上松緑さんと同一人物なんですね。現在の家元も数年前に「葵徳川三代」に家光役で出演しておりまして。日本舞踊は、最初は形が美しいというのが基本で、その上で、だんだんと動作のひとつひとつの意味が分かってきて自己表現ができるようになるのですが、これでいいということの

ない芸の世界です。今も、月に一度は藤子先生の跡を継がれた蘭景先生のところへ東京までかよっています。ようやく三十分ほどのお稽古をつけていただけのようになりました。人間国宝の藤子先生でさえも、「芸の道 八十路こせしも また遠く」と言われていました。



○長岡の日本舞踊をめぐる現状とこれからについて、どのようにお考えですか。

本格的に踊るためには、三味線などの地方じかたさんをそろえる必要がありますが、今の長岡の現状はテープを回している会が多いです。日本舞踊というのと、むしろかしそう、とか、厳しそうというイメージがありますが、昔のように、毎日、ビシバシ、稽古したら、誰も来ませんので、今は随分変わりました。でも、ただ楽しくやれたらということですと踊ることの本来の意味が体感できませんし、伝統の舞踊の形を崩してしまうと本来の意味が変わってしまうように思います。何はともあれ、まず、実物を見ていただくというのが一番かもしれませんね。どういうものなのかを知って欲しいと願っています。

長岡野菜は宝物

文・鈴木圭介

すずき けいすけ

長岡野菜ブランド協会代表



肴 豆



食用菊おもいのほか



里 芋



ゆうごう(夕顔の実)

トマトやキウリの旬が一向にわからなくなったこの頃だが、蒸かしナスが食卓に出ると「夏だねエ！」誰からともなく、こんなつぶやきがもれるだろう。「肴豆」や「おもいのほか」に秋の深まりを覚え、里芋を見ればおこたで食べる温かいのつべを思い出す。私たちの長岡には豊かな四季を感じさせるすばらしい野菜がまだたくさん残っている。

ほんの少し前までは、長岡だけでなくこの町でも四季折々の野菜くだものに囲まれ、情緒豊かな食生活であったのだが、ある時点からどうもおかしなことになってきた。

昭和三十年代半ばから始まった高度経済成長である。経済効率一辺倒の思想は、野菜やコメなどの農産物にさえ波及し、品種改良や栽培技術の進歩は旬の存在を忘れさせ、化学肥料や農薬の無差別使用など大量生産のためには手段を選ばない時代が続いた。

折から急速な発展を続けるスーパーマーケットは全店均質なもの売る傾向にあるから生産流通のサイドもこれに迎合し、味はともかくたくさん採れて形の揃う野菜が全国を席卷するようになってしまう。錢儲けの材料としての野菜果物。そこでは野菜くだものが食べ物扱いされなくなっていたのだ。

これらの大量の野菜に包囲されて私たちが先祖から受け継いできた大切な野菜、それは作り難くて形が揃わず、たくさん採れないがとても美味しいといういかにも野菜らしい野菜が、忘れ去られ消滅の危機にさらされるのも無理からぬことだっ



白雪こかぶ



だるまれんこん



体菜



長岡菜



ズイキ



梨ナス



糸瓜

たのかもしれない。

もともと日本産の野菜は「みつば」や「わさび」など二十種類くらいといわれている。その他の大多数の野菜は太古の昔から、人々とともに移動してきた。そしてそれが定着した地域で食文化の中心の役を担ってきたのである。それには長い年月が費やされ、先人たちの知恵の結晶が詰まっている。地域の野菜はご先祖様が残してくれた宝物にちがいない。相続税のかからない偉大なる遺産であり、まさに文化そのものではないだろうか。

長岡野菜は現在十三種類。みんな個性豊かなつわものばかりだ。神楽なんばんと長岡巾着(ナス)の炒め合わせは絶妙な取り合わせだし、グツと冷やしたゆうごうのサラダはビールで決まる。梨ナス、糸瓜の浅漬は言うこと無し。ズイキ、長岡菜、体菜など…

長岡市も新しく広くなった。新市域から新たに長岡野菜の仲間が増えてくるに違いない。これらを大切にしながら本物の豊かな食生活を楽しまたいものだ。



神楽なんばんと
長岡巾着(ナス)の炒め合わせ

野菜カレーのまち・長岡

文・清水 周

しみず しゅう

長岡グランドホテル



私は、一九九八年に長岡中央青果(株)の鈴木圭介社長が、「長岡野菜ブランド協会」を立ち上げ、朝日新聞が全国版で取上げたときから長岡野菜には大変関心をもっていました。

それは、子供の頃、農家の方が朝取りの野菜をリヤカーに積んでもってこられるのを、母がいつも買って、生のトマトやキュウリそして炒めた巾着ナスなどが山のように食卓に並べられ、その瑞々しい野菜を貪るように食べた頃の味覚が脳裏に残っていたからだと思います。

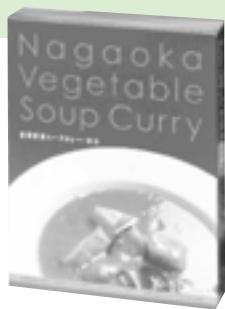
私は、五年前に縁あって故郷長岡に四〇余年振りに舞い戻りましたが、スーパー等で売られている野菜は、長岡産以外のものが多く、長岡野菜は毎月五と十の付く日に長岡商工会議所と北越銀行の間の通りで開かれる市等であるうじて入手出来るような状況になっていました。

長岡の人たちというか、長岡にずーと住んで居られる方々は、長岡野菜の美味しさに気付いていないとか意識する必要がなかったのを、鈴木社長が拘わり改めて取り上げたことを、

快哉事と考えております。

私は、ホテルに勤務するようになりましたので、地産地消に拘ることなく長岡地域外の人々にも、何とか、長岡野菜を改めて堪能していただきたいというので、「長岡野菜応援団」を標榜し、長岡野菜を使った料理を和洋中レストランや一般宴会はじめ婚礼披露宴にも出すようにしました。

「巾着ナスとフォアグラのミルフィーユ仕立て」「神楽なんぼんと牛肉の細切り炒め」「糸ウリとふかひれスープ」「赤ずいきの利休ソース掛け」等々です。



巾着ナスのミルフィーユ



巾着ナス



神楽なんばん



しかしながら、ホテルにお見えになる方は所詮限られておりますし、長岡野菜の取れる時期もほとんど夏です。季節を問わず、何とかもったたくさんの方に四季を通じて味わっていただけるようにならないものかと思案し、調理長が中心となって一年ほど試行錯誤して作ったのがレトルトカレー「長岡野菜スープカレー」です。

この「長岡野菜スープカレー」は、長岡野菜の代表格である巾着ナスと山古志の神楽なんばんを入れたもので、巾着ナスの食感と、神楽なんばんのピリツとしたスパイシーな辛さと、タマネギ等の野菜の甘味を夫々活かしたさっぱりした味わいとなっております。

外装は、中身だけでなく、見かけも大切だということ、長岡造形大学の福田毅先生が特別にデザインして下さいました。

これを商品化する時に一番心配したのが、レトルト食品は作る時に高温をかけますので、巾着ナスのあの堅い食感と味覚がうまく残ってくれるかということでしたが、何とか残す事が出来たかと思いません。

いままで、いろんな方に試食していただきましたが、神楽なんばんのせいでしょうか、かなり辛めに出来上がっておりますので、今後は辛さを少し抑えたもの等も作ってみようかと考えております。

レトルトカレー「長岡野菜スープカレー」が、長岡の新しいお土産品になればと願いつつ、これを機会に長岡野菜を食材とした商品をさらに開発し、もっともっと多くの人々に味わっていただき、京野菜、加賀野菜に負けない豊かな味覚と食感を持つ長岡野菜を堪能していただきたいと考えております。

小千谷の老舗割烹

二百五十年の歴史を

消すことはできない

小千谷船岡公園の坂道を下っていると、かつて「下夕町」と呼ばれた一帯がある。河岸段丘の傾斜地を上手く利用した木造三階の建物がひときわ目をひく。小千谷の歴史を物語る老舗割烹「東忠」である。地震で大きな被害を受けながらも、半年後には営業を再開。老舗の歴史と想いを十代目ご当主の東亮一さん、奥様で女将の八重子さんに聞いた。

○東忠の屋号と歴史について教えてください。

初代・東忠^{ひがしちゆうへい}兵衛が分家して、江戸時代の半ば頃、約二百五十年くらい前に、この地で料亭を始めました。その名に因んで「東忠」を屋号としています。「東忠」の前の湯殿川には信濃川に通じる船着場がありまして、この川に沿った道が昔のメインストリートです。兩岸には料亭や芸者衆の置屋などが並び、とてもにぎやかだったそうです。昭和四十年頃までは界限に十六軒の料亭がありましたが、今では昔からの店は私ども一軒だけになってしまいました。

○河井継之助が小千谷談判の後で「東忠」さんに寄ったと伝えられています。すが、そのお話を聞かせてください。

河井継之助と藩士の二見虎三郎は、「野七」という小千谷の旅館を宿にして慈眼寺で西軍軍艦の岩村精一郎との会談に臨みました。会談は決裂



「東忠」

十代目主人 東亮一さん
女将 八重子さんに聞く

聞き手・川口宗伊（茶道教授）



梅の間

し、「野七」への帰り道に「東忠」に寄って、二階の「梅の間」で遅い昼食を取られました。長岡藩の家老に対して、奉公人に給仕をさせるわけにもいかず、家の「ふさ」という娘に給仕をさせたようで、ふささんがその時のことを私どものおじいちゃんに、よく語って聞かせたようです。司馬遼太郎の「峠」が毎日新聞で連載された時は、このことが書かれていたのですが、単行本として出版された際に、この部分がカットされており、残念に思っています。この他にも、「北越雪譜」のことや詩人の西脇順三郎さんにもまつわるエピソードなども伝わっています。

○中越地震で大きな被害をうけられたようです。

古い建物なので、増築部分はずれ、土壁がほとんど落ちて、また、土蔵が崩れたりして大変な状況でした。暮れには廃業を考えまして、支援してくださっていた方にご挨拶に伺ったら、こちらが話を切り出す前に察して、「東忠」を閉めてはならないと諭されました。町の皆さん自身も被害を受けて苦しいのに、多くの方から支援をいただいて、本当に感謝しております。約半年休業していましたが、翌年の四月に再オープン致しました。あの時ほど、この仕事を愛おしいと思ったことはありません。あんな経験は二度とはしたくはありませんが、地震がなければ、そのことに気がつかなかったかも知れません。

○老舗としての今後についてお聞かせください。

一番大切なことは古臭さを感じさせないということだと思っています。老舗のためか、「東忠」は敷居が高いと思われることもありますが、古い「東忠」をご存知でない若い世代の方々には婚禮などでご利用いただいてもおります。古さを感じさせない「和モダン」な印象で、その折々に、お客様のご要望に対応させていただきたいと思っています。



復興しなければ 草に覆われて 忘れられてしまう

○ほとんど報道されていませんが、先日、安倍首相が来県された際に、小千谷の西軍墓地を訪問されました。船岡公園の西軍墓地には、どんな歴史があるのですか。

小千谷市は戊辰戦争の激戦地の一つで、長州の吉田松陰門下で奇兵隊の参謀だった時山直八が戦死したのも小千谷です。戦死した長州藩士は極楽寺という寺に埋葬されていたのですが、明治四年に長州藩の御用商人をしていた井口喜代助という人が、自分の土地があった船岡山の頂上付近に全部で七十三基の墓を移して供養したのが始まりです。その後、明治の終わり

頃に、小千谷のあちこちの寺にあった薩摩藩や他の従軍した

西軍諸藩の墓も船岡山に移して、今のよう

な姿になりました。小千谷市民は「招魂場」と呼んでいます。桜の花見に訪れたりして馴染み深い場所です。今回の大地震で墓はほとんど倒れてしまい、大きな被害を受けましたが、その復旧にあたって山口県の皆さんから絶大な支援が寄せられ、その縁で、山口県出身の安倍首相が今回この地を訪れることになったものです。



小千谷北越戊辰史跡復興支援の会
会長 野澤金一郎さんに聞く

聞き手・塚田清剛

○「史跡復興支援の会」を立ち上げることになった経緯は何ですか。

西軍墓地は市の公園の一部になっているのですが、役所としては宗教上のこともあって動きにくいということで、それならば市民有志で復旧しようということになったのです。私は観光ボランティアアガイドとして地元の振興のお手伝いをしていることもあって、会長を引き受けることになりました。山口や鹿児島や、他にも愛知、長野など西南諸藩にゆかりのある各県の県庁、市役所、商工会議所などに趣意書を送りました。特に山口県の反響が大きく、地震からはほぼ一年後の九月に山口、萩、下関の各市を訪れて大歓迎を受けました。遠く離れた越後の小千谷で、自分たちの先祖様が大事に供養されていたことが分かって、とても感激されました。

○小千谷と長岡は隣接していますが、当時の対応は随分と違ったように思いますが。

小千谷は幕府領(天領)で、侍がいなかったということが大きな違いだと思います。当時、小千谷の縮布を商う商人は頻繁に京や江戸に行っていましたから、情報により世の中が変わることを知っていましたし、西軍進駐のおりには勤王思想の厚かった町役人衆は、町はずれまで行き西軍を出迎えました。また各戸の間仕切戸を外すことで、敵がないことを見せ、町は焼き払われずに済みました。

○支援の会の活動を振り返って、現在の心境は

倒れた墓をあのままにしておけば、草に覆われて、やがて忘れ去られてしまいかねなかったこの墓地を、「死ねばみな佛」として祀ってきた先人たちの心と、その歴史を絶やしたく有りませんでした。小千谷の町の人たちは、これまで、このようにして守ってきたんだということの後世に伝えるのは私たちの責任ですから。今では墓地の掃除をしようと呼びかけると大勢の市民が集まってくれるようにもなりました。次は戊辰百四十年祭をやりたいですね。



復興後



被災状況

女神の孤独

草間 友子（高校教師）

それは去年の秋のことだった。三年生の「現代文」の授業を終えて、国語科準備室に戻る途中の私にHさんが話しかけてきた。

—先生、志賀直哉の本を読んでみたいんですけど……

その言葉は私にとって一つの驚きであった。ひと昔、いや、遙か昔、このような会話は教師と生徒の間で交わされる、日常的なものだったはずだ。しかし今、高校生の口から志賀直哉の名前が出ることは奇跡に近い。授業中に話す、他の作家や作品に生徒は敏感に反応し、本を借りに来る生徒は確かにいる。ただ、志賀直哉に關してはほとんど無反応だ。〈小説の神様〉は孤独な存在だ。それでも毎年授業の中で、私は志賀直哉の話をする。その孤独な作家は、大学時代、私の卒業論文のテーマだった。自宅の本棚の中から一冊の本を取り出した。

『志賀直哉全集 第一巻』（岩波書店）に自然と手が伸びた。その中にある「母の死と新しい母」という短編をHさんに読んでほしいと思った。昭和四八年に発行されたその本は、字体も用字も古く、文庫本と比べて



読みにくそうだった。Hさんに渡すとき、彼女の細い腕に本はとても重そうだった。この重さだけでも嫌になるかも知れないな。私は気が重くなった。

卒業するまでに返してくれればいいから、と私は言った。けれども、Hさんは冬休み前に感想を記した手紙を持って、本を返しに来てくれた。

—「荒絹」に登場する女神の孤独を何度も考えました。

一瞬返答に戸惑ったのは、実はその作品に覚えがなかったからだ。本を貸しておいて随分無責任な話である。彼女が帰ると同時に、私は大慌てでその作品を読み始めた。私は息を呑んだ。そこには絹のようになめらかな文章があった。志賀直哉を再発見したような驚きがあった。そして、最も大きな驚きはそのような作品を見出してくる、Hさんの、現代高校生の感性の豊かさだった。



山本周五郎、 長生橋を渡る？

佐藤 正二

(『長岡★堀口大學を語る会』代表)

私が堀口大學と西脇順三郎の交遊関係に興味を持ち、二人を調べ始めたのは実はほんの七、八年前からのこと。それまでは「井伏鱒二命、彼の書いたものなら小説であれ随筆であれ中学生のころから蒐めては、矯めつすがめつ手にとつて、われこそ日本一のファンだと自惚れていた（もちろん今だってそうだが）。

ところが定年退職後、暇つぶしにと思つて山本周五郎を読み始めた。これが面白い。肩のこらない戦前の講談系短篇から、戦後円熟期の「樅ノ木は残った」や「赤ひげ診療譚」など長編の数々まで、新潮文庫を一冊買つては読み、また一冊買つては読み読みしているうちに、いつの間にか書棚に三十冊を優に超えるほど並ぶようになった。周五郎は生前六百篇にも及ぶ小説を書いたというから、それに比べればまだ半分を少々超えた程度なのだが、それでも随分親しんできたとは思ふ。

さて、あるとき一篇の短編を読んでいて、私はなんだか妙な気分になってきた。小説の面白さもさることながら、そこにはどこか見覚えのある情景がやたら出てくるのだ。「五月雨に水嵩の増した信濃川はおどろおどろしいとしか見えない」とか、「一

(江戸から国元に着いてみると、家は) 御城の北側にあり…、西願寺の鐘が聞こえ…、王蔵院…」とあったりして、この小説がどうやらわが長岡藩を舞台にしているらしいことにやがて気づいた。西願寺は呉服町に現存する寺だし、王蔵院だって観光院と並んでかつて長岡にあった町名である。

長岡とはどこにも書いてないのに、これは一体どうしたことか？ そんな疑問から出発してその後、ほぼ一年間この短編と周五郎の周辺を調べ進めていくうちに、これが実はあの菊池寛との確執の中から生まれ、そして山本五十六元帥への密かなオマージュとして書かれた小説だということが判ってきた。ここでの詳細な論考は省くが、主人公の父保持忠太夫は長岡藩「寛永分限帳」の「江戸衆寄合組」にある実在の保地九郎右衛門がモデルだし、時代も「大浄院さまの御治世はじめ…」とあって、三代藩主牧野忠辰ころというふうに設定されていて、このほかにも長岡に関わる表現があちらこちらに出てくる。

そんなわけで周五郎が長岡のことを綿密に調べたうえで、この短編を書いたのは間違いないと結論づけ、数年前、『桃の井戸』のなぞ―山本周五郎と長岡との関わり―』として百枚近くに纏め上げた。周五郎と長岡を結ぶ接点は幾つかあったし、いや、ひよっとして彼が長生橋を渡ったことさえあったかもしれないと、今では思うようになった。歴史も小説も、ちょっとしたところから面白く、深い世界が広がっていくものである。小説の名は「桃の井戸」。『日本婦道記』の中にある短篇である。



散歩道

さんぽみち

2007 夏



三年目を迎えた フェニックス花火

訪れる人にとって魅力的な街であること

それは、子どもたちが誇りを持って暮らせる街

そして、創り出せるのは唯一我々大人たちの想いから

(復興祈願花火フェニックスのコンセプト)

平成十六年に襲った水害や震災そして雪害、想像を絶する自然の驚異を見せつけられたことも、今年は、暖冬の話に消されています。

今振り返ると、ちょうど二年あまり前、夢の実現のために動き出しました。言うこと、考えることは、簡単です。しかし、その思いを伝え、形にするのは、やはり容易では、ありませんでした。復興のために、シンボルとなるような大きな花火。試し打ちを三回も行った花火は、初めてのことに。たくさん仲間が、力を合わせたことが、大きな力につながりました。花火師にも大きなブレッシャーだったと思います。それぞれの花火師の心意気を感じさせてくれました。

涙の出る花火と評価され、二年目には、上げる前に大きな拍手をもって紹介され、みんなの花火が、定着したことを感じました。特に、空襲を経験した方が、この花火で終戦後はじめて花火大会に行くことができました。この話を聞いて、ひとつの時代の経過を感じました。

中山間地をもち、新しい交通網ができ、かつて街道を行き来した人の流れ



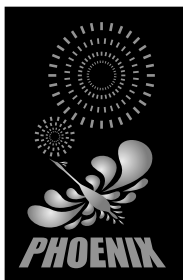
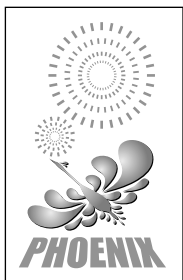
の変わった長岡のような街は、各地で見られます。災害を受けたことで、人と人の絆を復活させ、花火のように小さな星をたくさん集めて大きな花火として、外に発信することが、地域の活性につながります。実行委員会は、NPOとして各地域と連携するネットワーク事業、『食』『風』『闘牛』『マラソン&ウォーク』『音楽』そして『バスケット』その他の『スポーツ』など多様な事業により地域を活性化させるプロジェクト事業、地域独自の商品開発による経済を活性化するエンタープライズ事業、これらを支援するサポート事業など多岐にわたる地域活性化に取り組んでいます。

今年も、三年目、おかげさまで多くの方々に支えられ、活動してまいりました。フェニックスの迫力は、現地に来て、自分の五感で感じてこそ、大きな感動を得られます。それは、この花火が普通の花火でなく、みんなの想いで舞い上がってらる（らる）ことだからです。

今年もみんなで、フェニックスを舞い上げましょう。

廣井 晃

(NPO復興支援ネットワーク・フェニックス代表)



フェニックスマーク





楽しく描いて…

絵を描く暮らしで思うこと

「長岡の新しいPR誌にイラストを描いてもらえませんか？」その電話を受けたのは昨年九月のことでした。「文の林」目次ページの背景スケッチを描いてほしいとのこと。普段はカルチャー教室で色えんぴつ画の講師をさせていたのですが、印刷物の依頼を受けたのははじめてで、少し不安もありました。でも、とにかくやってみよう、やる！と決めて制作しました。必死で描いたので、創刊号ができ上がった時はとても感激しました。

今号で「文の林」も第三号を迎えましたが、スケッチを描くときに心掛けていることは創刊号の時から変わらず、心を込めて描くことです。読者の方の心が和んでいただけますように…と思いつながら描いています。

前述しましたが、絵の仕事は主に講師です。教室では「楽しく描く」がモットーです。何人かの生徒さんに「私は下手だから」と言われたのがきっかけでした。私は下手だから…の後に「絵を描くのは好きだけど、楽しめない」と続きます。この事に気付いてから、教室は仲間どうし明るく励ましあい、楽しんで描くことが大切だと思ふようになりました。

長岡の皆さんが（絵に限らず）趣味等を通してもっと元気になるように願っています。

渡部 司（イラストレーター）

未来の文化の担い手を目指す

高校文化部 を紹介します③

文化は一朝一夕には成り立ちません。未来の文化の担い手を目指して、頑張っている中越・長岡地域の高校文化部をシリーズで紹介しています。今回は、「中越高校写真部」です。

中越高校写真部

写真部は一九六六年の卒業アルバムに載っているのが誕生はその頃と考えられる。当時の部員はほとんどが男子だったが、今は圧倒的に女子が多い。三年生が卒業した今は九名の部員が毎日楽しく活動している。

年二回の撮影合宿を行っている。これまでに、岐阜県の白川郷(世界文化遺産)や長野県の妻籠(江戸時代の建物が現存し、重要な伝統的建造物群保存地区)、春の能登半島などをフィルムに収めた。撮影を通して広く知識を吸収し、写真に生かしている。

市民センターでモノクロ写真の作品展を六回開催し、多くの方々に見ていただいている。モノクロ写真を中心に、最近デジタル写真にも挑戦している。

フォトコンテストには全員で応募し、それぞれ上位を目指し努力している。



中越高校写真部のメンバー



作品展



撮影風景

ながおか文人会議は若者たちの文化活動を応援します。

越後長岡

百景 百歌

③

地域に秘められた宝物の風景を公募した
「越後長岡百景」と、その風景にふさわしい
「越後長岡百歌」の短歌を紹介します。

五十ごとうの市

店しまふ刻の迫りて 五・十の市

「まけたまけた」の 声のとびかふ

浅香しげ

五・十の市 昔ながらに 売る八百屋

値引きの札に 淡き雪降る 上村春夫

『おばあちゃんに
連れられて、

五十ごとうの市へ』

私の祖母は、すし屋の娘
だったので、寿司や魚料理
が得意でした。当時、よく
殿町の五十ごとうの市へ一緒に行
きました。魚、果物、花など
が売られていて、色とりど
りの空間でした。なじみの
魚屋のおばあちゃんと話し
こむおばあちゃんの脇で、
慌ただしく行きかう人たち
を眺めていたものでした。
今はスーパーなどで、何で
も買えますが、見た目は悪
くても、新鮮で旬の素材が
並ぶ市の様は、とても輝い
ているように感じます。

ながおか 文(ふみ)の林 平成19年夏号・通巻3号 平成19年5月7日発行

■発行/新潟県長岡地域振興局 新潟県長岡市四郎丸町173-2 電話0258-38-2507 メールアドレス ngt111410@pref.niigata.lg.jp

■編集/ながおか文人会議 ■URL: www.pref.niigata.jp/chiikishinko/nagaoka/shinkoukyoku/oshirase/humi/index.html

■編集スタッフ/安藤哲也/中山俊子/草間友子/立川恭子/塚田清嗣/竹内隆志/丸山典子

■制作・印刷/有めぐみ工房

無償配布です。ご自由にお持ちください。